

よそでは買えない品質を保ち、 オンリーワンのバラを 作り続けることが重要なんです

(南)とくなが園芸
とくなが・かずひろ
徳永 和宏さん
(上平良・49歳)

Profile

西条農業高等学校、東京農業大学を卒業後、千葉県の切花輸入商社に入社し、国内外の花の流通動向を学ぶ。平成4年に帰郷し「(南)とくなが園芸」に入社。現在は切りバラ生産と施設園芸資材の販売を行っている。また、バラの育種（品種改良）も行う。



写真_1 検品は一枝のボリューム感や、バランスを重視。写真_2 ハウスの温度は、冬は18℃、夏は25℃を目安に保たれる。バラは1年を通して出荷され、1つの苗から複数回採花される。写真_3 選花作業では、バラの花弁や葉にキズがつかないように台の上に置く回数を極力抑える。

大学を卒業後のこと。国内外の花の流通動向を学ぶために就職した外資系の切花輸入商社で、当時、見たこともないような海外の品種に触れ、刺激を受けた。しかし、「同時に悔しさも覚えました。そこが原点です」と言い切る。

大学でメリクロン技術（細胞レベルで組織培養する方法）を学んだ和宏さんは、新しい品種の生産にも積極的に取り組んでいる。特にスプレーバラ（一本の茎が枝分かれし、その頂点に数本の小ぶりの花がつくタイプのバラ）の育種（品種改良）の第一人者だ。数万種もあるバラを交配させ、世界に一つしかない品種を作り出す。重要なのは、色、形、香り、花持ち、生産性、どれが欠けてもだめだという。

「親の花が持つ特徴を基に、ある程度イメージして行きますが、うまくいくかどうかは運任せの部分もあります。自然からの贈り物ですね」と笑って話す。うまく交配できても、市場に出すまでには約3年掛かるが、それでも年に10品種程度は出品。バラの歴史は品種改良の歴史であるとも言われ、現在も世界で数万種類が存在する。

「バラは名前が大切なんです」と強調する。覚えやすく、かつ

特徴をつかんだ名前でないという。ヒットにはつながらないという。「たくさんの苦労があります、新しい品種を作るのはとても楽しいですね」と笑顔がこぼれる。バラはもともと病気に弱く、温度管理にも大変気を遣うとのこと。ハウスの中は夏は冷房、冬は暖房をかけ、18〜25℃の温度を保つ。現在、燃料の高騰が続く、農家のダメージも大きいという。また、気候の安定した海外から安い切りバラの輸入が増え、切りバラ農家の深刻さは加速度を増しているという。

「だからこそ、よそでは買えない品質を保ち、オンリーワンのバラを作り続けることが重要なんです」。

和宏さんは、広島県指導農業士として認定され、地域農業の振興・発展に大きな役割を果たしている。また、バラの生産だけでなく、廿日市市内で若い農業者に対しての助言などを通じて、農業者同士の横のつながりを強める活動も続けている。

「廿日市では、昭和40年代から4者で切りバラを生産し、現在まで一人も欠けることなく続いています。今後も他の地域や海外のものに負けない品質を保ちながら、認知度を上げていきたいですね」と話してくれた。

特集

産地の誇り―

バラ生産にかける思い ―特集259ページ―

バラの産地として、県内でトップの出荷数を誇る廿日市。昨年は広島市中央卸売市場（西区）に、県全体の4割に当たる74万本の切りバラを出荷。また、オリジナル品種の育成や栽培の新技术などを取り入れ、県内や全国のバラ生産のけん引役となっています。そうして生産されたバラには、作り手の価値観や生き方までもがにじみ出ています。今月は、バラの生産者にスポットを当てます――。

「廿日市でバラが生産されていることを知らない人が多く、もっと広く知ってもらいたいと思っています」。そう話すのは、上平良で切りバラの生産を行っている徳永和宏さん。祖父の代から施設園芸を行い、現在、1800坪の農場に10棟のハウスで切りバラを栽培。年間40万本を市場に出荷している。

バラの栽培を始めたのは父の勲さんで、昭和40年代に真っ赤な大輪のスーパースター（ドイツ）という品種が登場したことから、大きく花の市場が変わっ

ていったという。それまでは、日本で花と言えば菊が主流。「昔のテレビ番組でも花束贈呈のシーンで菊が使われていたのが印象的です」と和宏さん。

高価なイメージと花持ちが長いことから、このスーパースターは爆発的人気を呼び、日本の高度経済成長とともにバラの需要も急速に伸びていった。

「一生懸命やっていた父を見て育ち、この世界に入ろうと決めました」。高校、大学を農業系に進学し、父の背中を追った。本当に花が好きになったのは、

バラの種類は多く、世界には3万〜5万品種存在すると言われている。写真は、スプレーバラの「ロイヤルホワイト」。(南)とくなが園芸が育種したオリジナルの品種で、鮮やかな白が特徴。